【主イエスから目を離さずに】

［教会総会日の礼拝説教］

『ヘブル人への手紙』

11章1～3節

（主題聖句=2節前半）

熊　谷　徹

2014年2月23日（第4主日）

【序】今年度の主題聖句；

教会とは何か。教会とは「キリストをかしらとする信仰共同体」である。『エペソ人への手紙』1章23節にこうある；「**教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。**」同じく5章23節にはこうある；「**キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられる**」。こう聖書が告げるように、教会とは「キリストをかしらとする信仰共同体」なのである。その教会にとって最も大切なことは、「教会のかしらである主イエスから目を離さずにいる」ということである。その最も大事なことを『ヘブル人への手紙』はこう告げている；「**信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。**」…『ヘブル人への手紙』12章2節前半である。教会にとって最も重要なことを述べているこの御言葉を、今年の私達の教会の「主題聖句」としたいと思う。今日は午後に教会総会が開催される。そこで今朝はこの年間主題聖句から、教会のかしらなる主の御心を学びたいと思う。

【1】多くの証人が私達を取り巻いている（1節 a）；

（1）初めにこの御言葉の前後関係を簡単に見ておきたい。この聖句は12章1節から3節という短い区切りの真ん中に位置する。その1節にはこうある；「**こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか**」。

冒頭の「**こういうわけで**」という言葉は、その前の11章全体を受けている。「信仰の章」と呼ばれている11章に記されていたのは、「信仰とは何か」ということと、その信仰を抱いて人生を雄々しく歩んで天に帰った信仰者たちのことである。著者は11章1節でこう言った；「**信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです**」。そしてそのような信仰を抱いて地上の人生を走り抜けた人たちのこと、例えば、信仰の父アブラハム、イサク、ヤコブ、偉大な指導者モーセやダビデ、信仰を抱いて苦難と戦った無名の信仰者と殉教者たち、それらの人たちのことを語って来た。4節ではこう語った；「**彼は死にましたが、そ**

の信仰によって、今もなお語っています」。これらのことを受けて12章1節で「**こういうわけで**」と言っているのである。だから著者が言う「**このように多くの証人たち**」とは、それらの信仰者たちのことである。それら多くの信仰者たちが「**雲のように私たちを取り巻いている**」と著者は言う。

(2)「**証人たちが雲のように私たちを取り巻いている**」と訳されたギリシャ語の直訳は、「**私達を囲んでいる証人たちの雲**」である。大勢の証人達に取り囲まれていることを「まるで雲に囲まれているようだ」と比喩的に表現したものである。この比喩に使われているのは古代ギリシャ・ローマの競技大会である。古代ギリシャでは4年ごとにオリンピアで競技大会が開かれた。首都ローマでは大きな円型競技場・コロッセウムで盛大な競技大会が開催された。そうした競技大会には、大勢の観客が押し寄せ、選手たちを応援した。そうした大観衆を「雲」になぞらえて「私達を囲んでいる証人たちの雲」と言い、自分達を競技場で戦う選手達になぞらえて「このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いている」と言うのである。

【2】重荷と罪を捨てて走り続けよう(1節 a);

(1)次に著者は競技場の選手に目を向けてこう語る;「**私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走**[ag<u>o</u>n]**を忍耐をもって走り続けようではありませんか。**」。

「**走り続けようではありませんか**」と言っていることから、著者が想定しているのはトラック競技やマラソンの選手である。「**走り続ける**(trech<u>o</u>)」と訳された言葉は「**走り抜ける**」と訳しても良い。延々と走り続けるというよりも、ゴールを目指して走り続けて最後まで「走り抜ける」というイメージである。彼らが「**走り続ける**」こと、最後まで「**走り抜く**」ことを邪魔するものがある。それを著者は「**いっさいの重荷**」と表現する。

選手が走るのに不要なもの、持っていてはいけないものがある。例えば冬にマラソンを走る時にオーバーを来て防寒靴を履いて走る人はいない。それらは

日常生活には不可欠であっても走る時は邪魔となる。同じように信仰の生涯というマラソンコースを最後まで走り続けようとする信仰者の邪魔となるものがある。著者はそれを「**いっさいの重荷とまつわりつく罪**」と言うのである。

(2)「**いっさいの重荷**」が具体的に何を指すのかは不明である。だが11章で語った「信仰」との関連からすれば、「信仰」を妨げるものを「**重荷**」と表現したものと思われる。

「**重荷(ogkos)**」と訳された言葉は聖書ではこの箇所にしか登場しない。そのため様々な意味に解されて来た。例えばこれを「**高慢**」のような霊的罪とみなす解釈がある。というのは、古典ギリシャ語ではこの言葉は比喩的に「**高慢**」という意味でも用いられていたからである。そこでこの箇所も道徳的・霊的比喩として捉えようとするのである。即ち、キリストを信じる者は「高慢」を捨てて謙遜にならなければいけない、という意味に捉えるのである。魅力的な解釈だが、ここは陸上競技が想定されている場面だから、少々無理であろう。

この言葉の基本的な意味は「**重さ;重い物**」である。昨年80歳で世界最高峰の山エベレストに登った三浦雄一郎氏は、日頃30キロもあるリュックを背負ってウォーキングをして体を鍛えていたそうである。あのリュックがまさに彼の「重い物」である。古代ローマの選手も練習の時には「重い物」を付けてトレーニングしていたらしい。練習時には重い物をつけてトレーニングしても本番の競技で「**重い物**」を足に巻きつけて走る人はいない。「重い物」は取り外して走るのである。これを信仰の歩みに当てはめれば、信仰生活に不要な余分なものを捨てて、一途に信仰の道を歩めという意味になる。

それでは私達にとっての「**重荷;重い物**」とは何であろうか？例えば、思い煩い、心配事、疲れ…など「重荷」は人それぞれに違う。どうしたらそれらの重荷を捨てることが出来るのか。主イエスはこう仰っている;「**すべて疲れた人、重荷を負っている人は、私の所に来なさい。私があなた方を休ませてあげます**」(マタ

イ 11:28)。こうおっしゃるキリストの所に行き、重荷を降ろすのである。自分が抱えている様々な悩みや苦しみなどを主イエスにお話しするのである。そして重荷を主イエスに委ねるのである。それが私達にとっての「**重荷を捨てる**」ということである。

(3)また著者は、「**まつわりつく罪を捨てよ**」と言う。服の裾や靴の紐が足にまつわりついたら走れない。走るどころか躓き倒れてしまう。それと同じように、罪がまとわりついていたら、私達は躓き倒れる。私達に「**まとわりついて**」私達を躓かせようとする「**罪を捨てて…忍耐をもって走り続けよう**」と著者は言う。では、「まとわりつく罪を捨てる」にはどうしたら良いか。罪を神に告白すれば良いのである。聖書はこう告げている;「**もし、私達が自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私達を聖めて下さいます**」(Ⅰヨハネ 1:9)。

(4)著者は、「**忍耐をもって走り続けようではありませんか**」と言う。信仰において大事なのは「忍耐」である;最後まで耐え忍ぶ心である。私達は困難なことや辛いことがあると、途中で諦めたり投げ出したりしがちであるが、だからこそ「忍耐をもって走り続けようではありませんか」と著者は励ますのである。

「**私たちの前に置かれている競走**」と著者は言う。私達が走る信仰の人生というマラソンは「神が用意して下さったマラソン競争」なのである。その競争を「忍耐をもって走り続けよう」と著者は言うのである。「**最後まで耐え忍ぶ者は救われます**」(マタイ 10:22)と聖書は約束している。忍耐を抱いて信仰の道を最後まで走り抜けた人に神は栄光の冠を授けて下さるのである。

【3】信仰の創始者であり完成者(ヘブル12:2～3);

(1)マラソンレースにはゴールがある。私達の人生のゴールはどこにあるのか。どこを目指して走り続けて行けば良いのか。**2節前半**で著者はこう告げる;「**信仰の創始者**[archegos 別訳「指導者」]**であり、完成者であるイエスから目を離**

さないでいなさい」。

競争選手はゴールを目指して走る。信仰者も同じである。信仰者が目指すゴールは、「**信仰の創始者であり、完成者である主イエス**」である。

主イエスは「**信仰の創始者である**」。主イエスが私達の信仰のスタート・ラインに立っている。そのお方が同時に「**信仰の完成者である**」。私達の信仰生活のゴールにも主イエスが立っている。私達の信仰という道をスタートさせて下さるのは主イエスであり、私達が走る道を用意して下さったのも主イエスであり、最後に到達するゴールもまた主イエスなのである。そのお方から「目を離さずに」走り続けなさい、とこの御言葉は告げるのである。

「**目を離さずに**[aphoro<u>o</u>ntes eis]」と訳された言葉は、直訳的には「～の中へと(eis)目を注ぎ(aphoro<u>o</u>ntes)」で、「じっと見る」「見つめる」「凝視する」という意味である。競争選手がゴールを「じっと見つめて」スタートし、ゴールから「目を離さずに」走り続けるように、主イエスを「じっと見つめ」なさい、主イエスから「目を離さないで」走り続けなさいと著者は言うのである。

主イエスの弟子たちが真夜中に舟でガリラヤ湖を渡ろうとしていた。ところが強風に煽られて進めなくなった。そこへ主イエスが湖の上を歩いて近づいて来た。ペテロは大喜びして、「私にも湖の上を歩かせて下さい」と頼んだ。主イエスが「来なさい」と言うのでペテロは舟から出て、水の上を歩いて主イエスの方に行った。その場面をマタイはこう記す;「30 **ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。**31 **そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」**32 **そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。**」(マタイ 14:30-32)。

ペテロは「主イエスから目を離さずに」いた時は水の上を歩いていた。彼が沈んだのは主イエスから目を離して荒れる湖の水を見て恐怖に襲われたときであった。この出来事は私達が主イエスから目を離すときにどうなるかを教えている。平安を失い、狼狽し、嵐に呑み込まれ、沈んでしまうのだということである。主イエスを見つめ、主イエスから目を離さずに歩んで行くべきなのである。

（2）主イエスについて、**2節後半**はこう告げる;「**イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに**[anti]**、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。**」。

「**はずかしめをものともせずに十字架を忍び**」とある。十字架に死なれたキリストが私達の「信仰の創始者」である。主イエスは、私達のために十字架に命を捨ててくださった。私達が滅びることなく永遠の命を持つために、キリストは、罪ある私達の身代わりとなって、十字架に命を捨て、罪の裁きを受けて下さったのである。キリストの身代わりの死の故に、私達は罪を赦され、救われ、永遠の命を得ることができるようになったのである。私達が永遠の命を得ることができるようにと、キリストは、十字架に命を捨てたのである。これが私達の信仰の原点であり、信仰の出発点・スタートラインである。キリストはあなたを罪と滅びから救った救い主であり、あなたの信仰の「創始者」なのである。だから、十字架に死なれたキリストから「目を離さずに」走り続けて欲しい。

最近私の後輩が二人、すごいことをやってくれた。後輩と言っても大学が同じというだけで、それ以外の繋がりは無い。それなのに何故か嬉しくなってしまうから不思議である。一人は理工学部の後輩・小保方晴子女史。万能細胞ＳＴＡＰの発見という偉業を成し遂げた。もう一人はショートプログラムで史上最高得点を出して金メダルを取った羽生結弦選手。その冬季オリンピックも13時間後に閉会式を迎える。数々の熱い戦いが繰り広げられたが、華々しい熱戦の影には私達の想像もつかない血のにじむような努力があった筈である。

信仰という名のマラソンレースもそれと似ている。信仰の歩みも平坦でラクチンで楽しいだけというワケにはいかない。私は信仰を持って46年になるが、これまで信仰ゆえの様々な試練や患難に逢ってきた。信仰上の葛藤や霊的な悩みや戦いも多々あった。これから先にもきっとあるだろう。だが、私達には「**信仰の創始者であり、完成者である主イエス**」がついている。そのお方がこう仰っている

のである;「**あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです**」(ヨハネ 16:33)。こう言って私達を励まして下さるお方から「**目を離さずに**」走り続けてゆこうではないか。

(3)最後に**3節**で著者は言う;「**あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。**」。

ここに著者が提示するキリストは、受難の主イエス、十字架に死なれた主イエスである。信仰の創始者であり完成者である主イエスは、受難のキリストであり、十字架に死なれた救い主である。著者は、このお方のことを「**考えなさい**」と言う。この言葉(analogizomai)は「少しは考えなさい」ということではなく、「熟考する、思い巡らす」という意味での「考える」という意味である。著者は、自分の苦しみや試練に目を奪われずに、キリストの苦しみと試練について「よく考えてみなさい」、キリストの十字架について「熟考しなさい」、主イエスが味わった苦しみを「思いめぐらしなさい」と言うのである。それは「**あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないため**」なのである。

【結】主イエスから目を離さずに;

キリストは、「**十字架を忍び**」、十字架に贖いの死を遂げて下さった。その死によってキリストは私達のために「**信仰の創始者**」となられた。だがそれで終わったのではない。キリストは三日目に死を打ち破り、復活し、天に昇り、「**神の御座の右に着座された**」。キリストの復活、昇天、そして神の右の座への着座、これら一連の主のみわざによって、私達の救いは完成したのである。これら一連のことを通してキリストは私達の救いを完成し、「**信仰の完成者**」となられたのである。

「キリストは信仰の創始者であり完成者である」。この言葉はそのまま教会にも当てはめることができる。即ち「キリストは教会の創始者であり完成者である」と言うことができる。教会とは何か。教会とは「キリストをかしらとする信仰共同体」

である。「**キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられる**」(エペソ 5:23)。キリストをかしらと仰ぐ信仰共同体である教会にとって最も大切なことは、「教会のかしらである主イエスから目を離さずにいる」ということである。十字架に死に私達を死と滅びから救い出して下さった救い主イエス、死を打ち破った勝利者イエス、死の力を打ち破って蘇った復活者キリスト、そして今、天に昇り私達を見守っておられる永遠者キリスト、そのお方が私達の「**教会のかしら**」(エペソ 5:23)である。そして一人一人のキリスト者は、その器官であり枝なのである。

教会にとって最も大切なことは何か。それは一人一人のキリスト者が「教会のかしらなるキリストから目を離さずにいる」ことなのである。聖書は告げる;「**信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい**」…『ヘブル人への手紙』12章2a節。◇